

## 初期ゲルク派の聖典觀について

木村 誠 司

### はじめに

聖典，それは宗教を成り立たせている基盤である。人がもし聖典を誠実に読もうとするなら，人は聖典の記述すべてを信ずるべきだろうか，それとも主体的にあれかこれかの選択を行いながら読み進むべきだろうか。前者を盲信的，後者を合理的と決めつけるのはたやすい。しかし，聖典のある部分を是とし，他の部分を非とすることは，聖典そのものに対する冒瀆であり，人間の傲慢のような気もするのである。しかも，あれかこれかの選択が，もし合理を装った恣意的なものであるなら，それはけして聖典を読んだことにも理解したことにもならないであろう。一体，人はどのような姿勢で聖典に接するべきなのだろうか。

### I

ゲルク派 (dGe lugs pa) の開祖ツォンカパ = ロプサンタクパ Tsong kha pa Blo bzang grags pa (1375-1419) は，きわめて明確な姿勢で聖典に接した。ツォンカパは，『了義未了義を区別する論書，善説心髓』 *Drang ba dang nges pa'i rnam par phye ba'i bstan bcos Legs bshad snying po* (以下『善説心髓』) において，次のように述べている。

思慮ある者達は，真実 (de nyid, tattva) がどのようなものであるかを理解する手段 (thabs, upāya) に励まなければならない。それは，また，勝者 (rgyal ba) の聖言 (gsung rab) の未了義 (drang ba'i don, neyārtha) と了義 (nges pa'i don, nitārtha) を区別することに依存し，その二つの区別は，また，〈これは未了義である〉〈これは了義である〉と説く<sup>1)</sup> 聖典 (lung, āgama) だけによって可能ではないのである。……中略……それは，また，了義の聖言

の意味を別なものとして導くことに対し否定を行うもの (gnod byed) であり、かつ別なものとして導くことは不可能であって、その意味であると確定する証明を行うもの (sgrub byed) である論理 (rigs pa, nyāya) によって正しく確定されたものに従ってから、密意 (dgongs pa, abhiprāya) を探らなければならないので、究極的には無垢 (dri ma med pa) の論理だけ (nyid) によって区別しなければならないのである。(Pha, 3a<sup>2</sup>-3b<sup>1</sup>)

ツォンカパは、聖典読解に際して、論理を重視する自らの姿勢をこのように宣言したのである。この直後に、ツォンカパは、論理重視の姿勢が、仏陀由来のものであることを示唆するかのようになり、次のような偈を引用した。

比丘達よ、賢者達が熱したり (tāpa, bsregs), 切断したり (cheda, bcad), 磨いたり (nikaṣa, brdar) して、黄金 [を手に入れる] ように、よく考察してから、私の言葉を受け入れるべきであるが、尊敬の念によって [受け入れるべき] ではない。(Pha, 3b<sup>2</sup>)

この偈は、出典こそ不明であるが<sup>2)</sup>、近代の仏教論理学研究書において、よく目にする偈である。たとえば、ムケルジー S. Mookerjee は、*The Buddhist Philosophy of Universal Flux* の序文において、「仏教はその最初期からその精神において批判的であった。仏陀は知性の巨人であり、何よりも合理主義者であった。」と主張しその主張を裏付けるものとして先の偈を引用している<sup>3)</sup>。また、服部正明氏は、*Dignāga, on Perception* の中で、「ディグナーガは聖典の無条件な権威を承認しなかった。彼によれば、仏陀の言葉はそれが妥当なものとして承認される前に、批判的なテストを受けなければならないのである。この批判的な態度を彼は仏陀から継承し……」と述べて、件の偈を引用する<sup>4)</sup>。ムケルジーと服部氏は、共にこの偈を、カマラシーラ Kamalaśīla (740-795) の『撰真実論難語釈』*Tattvasaṃgrahapañjikā* 序章からの引用として提示している。ロシアの碩学シチェルバッキー th. Stcherbatsky も、*Buddhist Logic* でこの偈に触れ、「すでに述べてきたことから明白なように、そしてこれからの分析のすべてによって証明されるのであるが、仏教哲学は明らかに批判的、アンチドグマ的な傾向を持つのである。」という彼の見解を保証するものとして引用している。シチェルバッキーは、さらに『撰真実論難語釈』序章の他に、カマラシーラの別著『正理一滴論前半要約』*Nyāyabinduṭpūrvapakṣasaṃkṣipta* にも、同じ偈が引用されていることを明記し、その偈に対するカマラシーラの解釈をも、あわせて紹介し

た<sup>5)</sup>。

さて、以上三人の研究者は、いずれも、仏教が合理的・批判的な宗教つまり論理重視の宗教であることを闡明するものとして件の偈を引用している。ツォンカパにも同じことが言えるであろう。しかし、近代の研究者とツォンカパとを論理重視という共通項で括るのは、安易な発想であり、本稿の目指すところでもない。少くとも一方は研究者で、他方は宗教者であることは忘れてはなるまい<sup>6)</sup>。本稿は、単に、聖典読解に際し論理重視の姿勢を宣言したツォンカパが、その教証とした件の偈は、初期ゲルク派においてどのように解釈されていたのか、そしてその解釈の由来は何かということの一端を紹介するものにすぎない。

## II

ツォンカパの三大弟子と言われる ギェルツァブ = タルマリンチェン rGyal tshab Dar ma rin chen (1364-1432)・ケードゥップジェ = ゲレクペルサンポ mKhas grub rje dGe legs dpal bzang po (1385-1438)・ゲドゥンドゥップ = ダライ = ラマ一世 dGe 'dun grub Dalai Lam I (1391-1474)<sup>7)</sup> は、件の偈にそれぞれ解釈を与えている。

まず、タルマリンチェンは『量決択大注、密意解明』*bsTan bcos tshad ma rnam nges kyi ñik chen dGongs pa rab gsal* (以下『密意解明』)<sup>8)</sup>において、極度に完成された用語を駆使して、次のような解釈を示す。

「比丘達よ……。」と〔世尊が〕説いたように、最初の二つの認識対象 (gzhal bya, anumeya) の状態 (gnas) を事物の力から生じた論理 (dngos po stobs zhugs kyi rigs, vastubalapravṛttanyāya) によって清浄に考察し、永遠に知覚外のもの (shin tu lkog gyur, atyantaparokṣa) を説く個擲についても、前後の矛盾 (snga phyi 'gal ba) と直接関接の矛盾 (dngos shugs 'gal ba) の有無を事物の力の論理によって考察し、永遠に知覚外のものだけは、三つの考察によって清浄な聖典 (dpyod gsum gyis dag pa'i lung) の証因 (rtags) に依存して推理する方法を確定したのであり (Ja, 4b<sup>4-6</sup>)

ケードゥップジェは、『量七部莊嚴、心の闇を払うもの』*Tshad ma sde bdun gyi rgyan Yid kyi mun sel* において、次のように解釈する。

世尊によって「比丘達よ……。」と言われた御言葉 (bka') の意味も認識手段 (tshad ma, pramāṇa) によって考察しなければならないと説いているからで

あり……中略……論理に依存せず言葉だけに従う者 (tshig tsam kyi rjes su'brang ba) は、鈍根の信に従う者 (dbang po rtul po dad pa'i rjes su'brang ba) であるとすべての聖者に知られているからである。取捨 (blang dor) の基盤 (gnas) を論理によって考察するものは、法に従う者 (chos kyi rjes su'brang ba) であると賢者に讃えられるのである。(Tha, 4b<sup>2-6</sup>)

また、ゲドゥンドゥブは、『偉大なる量の論書, 正理莊嚴』 *Tshad ma'i bstan bcos chen po Rigs pa'i rgyan* の中で、

経において「比丘達よ……」と説かれているように、最初の二つの認識対象の状態を事物の力の論理によって清浄に考察し、永遠に知覚外のものを聖典の証因に依存して推理し、それについても承認は、前後の矛盾と直接関接の矛盾等の有無を事物の力の論理によって考察する方法を確定したのであり (7a<sup>3-4</sup>)

と述べている。

三人の直弟子達のうち、ケドゥップジェの解釈は他の二人と趣を異にしている。ケドゥップジェは、論理重視の姿勢と言言葉だけに依存する姿勢とを対極にあるものとして示し、前者こそ仏陀に由来する正しいあり方であるとする、いわば総論的な解釈を提示しているのである。これは、すでに見た『善説心髓』におけるツォンカパの立場と符合するものであろう。ゲドゥンドゥブの解釈は、一見してわかるように、タルマリンチェンの解釈を継承祖述したものである。ここでは、タルマリンチェンの解釈に的を絞り、考察してみたい。

### III

タルマリンチェンは、彼の解釈が何に基づくものであるかを具体的に指摘していないがその解釈は、彼の『量評釈頌の解説, 解脱道不顛倒明説』 *Tshad ma rnam'grel gyi tshig le'ur bya pa'i rnam bshad Thar lam phyin ci ma lag par gsal ba* (以下『解脱道不顛倒明説』) の一部を下敷きにしたものと思われる。『解脱道不顛倒明説』は、言うまでもなく、ダルマキールティ Dharmakirti (600-660) の『量評釈』 *Pramāṇavārttika*, *Tshad ma rnam'grel pa* の注釈書である。タルマリンチェンは、聖典をきわめて冷静にそして論理的に見据えたダルマキールティの聖典観を継承し、ダルマキールティの聖典観に基づいて件の偈を解釈したのである。結論を先に述べる形となったが、以下で論証してみよう。論証は次のような方法で行なえば、十分であろうか。まず、ダルマキールティの

聖典観を明確にし、次にそれがタルマリンチェンの『解脱道不顛倒明説』において継承されているか否かを判断する、もし、継承されていると判明すれば、後は、件の偈に対する解釈と『解脱道不顛倒明説』の記述とを照合し、一致すればよいのである。

さて、では、ダルマキールティの聖典観を明確にしてみよう。ダルマキールティの聖典観は、『量評釈』「為自比量」*Svārthānumāna, Rang don rjes su dpag pa* 章 kk. 214-216 および自注において、きわめて明瞭に示されている。幸い、kk. 214-216 および自注のほとんどが若原雄昭氏によって和訳されているので<sup>9)</sup>、同氏の訳を参考にしつつ、その個擧の趣意を述べ、ダルマキールティの聖典観を明確にしてみたい。この趣意は当然のことながら、筆者の理解に基づいて構成されたものであり、必ずしも、ダルマキールティの真意を伝えたものとは言えないかもしれない。したがって、以下でなされる論証も、恣意的なものであるという謗を免れないかもしれない。しかし、現時点での筆者の理解は、粉れもなく、次に示す通りである。ダルマキールティは、まず、k. 214 において、聖典に厳密な三条件を付し、その三条件を具えたものだけを正しい聖典であるとする。ダルマキールティは言う。

(1)[文章を一つの意味にまとめることに役立つ (vākyānām ekārthopasaṃhāropakāraḥ)]<sup>10)</sup> 結合 (saṃbaddha 'brel pa) [=首尾一貫性] そして(2)適切な手段 (anugūṇopāya, rjes mthun thabs) そして(3)人間の目的 (puruṣārtha, skye bu'i don) を述べる文章 [=聖典] の考察が主要なものであるが、それ以外 [の聖典の考察] は主要なものではないのである<sup>11)</sup>。k. 214

さらに、ダルマキールティは聖典が偽りのないものであることつまり聖典の斉合性 (avisamvāda, mi slu ba) がどのようにして確定されるかを論じ、

経験される対象 (dṛṣṭārtha, mthong dngos) と経験されない対象 (adṛṣṭārtha, ma mthong dngos) その二つの対象について、知覚 (pratyakṣa, mngon sum) と二種の推理 (anumāna, rjes su dpag) によっても否定がないこと (abādhaka, gnod med) が、これ [聖典] の斉合性である。k. 215

と言う。ダルマキールティは、ここで、聖典の記述する対象を、(A)知覚の対象、(B)聖典に依存しない推理 (anāgamāpekṣānumāna, lung la ltos pa med pa'i rjes su dpag) の対象、(C)聖典に依存する推理 (āgamāpekṣānumāna, lung la ltos pa'i rjes su dpag pa) の対象に分け、三つの対象がそれぞれ聖典に説かれ

た通りであることを、(A)に対しては知覚、(B)に対しては聖典に依存しない推理、(C)に対しては聖典に依存する推理によって確認して、始めて、聖典の斉合性が成立すると言うのである。三つの対象のうち、(C)は、ダルマキールティによって一応推理の対象とされてはいる。しかし、ダルマキールティは、それは、実は、通常の知覚と推理によって理解されない (pratyakṣānumānāgamyā) 対象であり、(C)に関する聖典の斉合性は、(A)・(B)二つの対象に関して聖典が斉合性を持つならば、(C)についても同様であろうという共通性 (sāmānya, spyi) の上に成立しているにすぎないとして、

信頼すべき人の言葉 (āptavāda, yid ches tshig) は斉合的であるという共通性を持つので、これ〔聖典〕の感覚を越えた (parokṣa)<sup>12)</sup> 領域に関する知も推理たるものであると説いたのは他に手段がないからである<sup>13)</sup>。k. 216

と述べるのである。さて、kk. 214-216 および自注の趣意は以上の如くであるが、これはさらに次の三点に要約されよう。

(i) (i)(ii)(iii)の三条件を具えたものだけを正しい聖典とする。(k. 214)

(ii) 聖典の記述を(A)(B)(C)三つの対象に関するものに分け、その三つが知覚と二種の推理によって斉合的であると確認された時、聖典の斉合性が確立する。(k. 215)

(iii) 三つの対象のうち、(C)聖典に依存する推理の対象は、実は、通常の知覚と推理によって理解されない対象であるが、他の二つ(A)(B)に関して聖典が斉合的であることに基づき、その斉合性が保証される。(k. 216)

この (i) (ii) (iii) を、タルマリンチェンの『解脱道不顛倒明説』において、確認し、しかる後に件の偈に対する彼の解釈とを照合すれば論証は終了する。

タルマリンチェンは、k. 214 を次のように注釈している。

(i) 輪廻の起滅 ('khor ba 'jug ldog) によってまとめられた取・捨・非苦非楽 (blang dor btang snyoms) と設定されるべき諸々の意味を首尾一貫 ('brel chags) してまとめることに役立つ結合、そして(ii) 人間の望む目的〔つまり〕生天 (mngon mtho) と解脱 (nges legs) の二つを成就することに適切な手段、そして(iii) その手段によって成就されるべき人間の望む目的を述べている何らかの言葉〔=聖典〕それを権威 (tshad ma) であると把握するべきであると説くが、それ以外の聖典を主要なものとしないのである。(Cha, 99a<sup>2-3</sup>)

タルマリンチェンは、聖典が具えるべき三条件をこのように述べ、さらにこの三

条件を具えた聖典を、

三つの考察によって清浄なる聖典<sup>14)</sup> (Cha, 99a<sup>4-5</sup>) と呼んでいる。ここで、要約(i) は確認された。

次に、タルマリンチェンは、k. 215 に対して、

それ〔聖典〕が権威 (tshad ma) である理由 (rgyu mtshan) は何かと言うならば、〔第一の〕経験される対象〔つまり〕知覚されるものを説く場合、知覚によって否定がないこと……中略……〔第二の〕経験される対象〔つまり〕知覚外のものたる対象を説く場合、事物の力から生じた推理によって否定がないこと……中略……永遠に知覚外のもの それらが説かれた通りに承認されることについて、聖典に依存する推理によっても否定がなく、自語の前後の矛盾と直接関接の矛盾がないことなのである。(Cha, 99b<sup>1-4</sup>)

と述べている。ここで、タルマリンチェンは、三つの対象とそれに対応する認識手段をダルマキールティと異った名称で呼んでいる。ダルマキールティの場合は、

対 象	認識手段
(A)知覚の対象	知覚
(B)聖典に依存しない推理の対象	聖典に依存しない推理
(C)聖典に依存する推理の対象	聖典に依存する推理

であり、タルマリンチェンは、それを

対 象	認識手段
(A)知覚されるもの	知覚
(B)知覚外のもの	事物の力から生じた推理
(C)永遠に知覚外のもの	聖典に依存する推理

としている。用語上の問題を抜きにすれば、要約(ii) は、ここで確認されるであろう<sup>15)</sup>。

k. 216 の注釈において、タルマリンチェンは、

信頼すべき人の言葉〔の中でも〕永遠に知覚外のものを説く仏陀のこの御言葉の対象は永遠に知覚外のものであるとしても、認識手段 (tshad ma) によって成立しないという過失 (skyon) はないことになる。最初の二つの認識対象〔(A) 知覚されるもの・(B) 知覚外のもの〕を説く二つの御言葉と斉合的であることにおいて共通である (mtshung pa) という証因によって理解可能であるから。

(Cha, 100b<sup>1-2</sup>) と述べる。このタルマリンチェンの注釈は、要約(iii) と一致す

るであろう。以上によって、要約 (i) (ii) (iii) は、タルマリンチェンの『解脱道不顛倒明説』において確認された。件の偈に対するタルマリンチェンの解釈は、上記『解脱道不顛倒明説』を下敷きにしたものであることは、両者を照合すれば、最早一目瞭然であろう。

したがって、件の偈に対するタルマリンチェンの解釈は、ダルマキールティの『量評釈』「為自比量」章 kk. 214-216 および自注における聖典観を忠実に継承したものであり、『量評釈』に対するタルマリンチェンの注釈書『解脱道不顛倒明説』を下敷きにしたものである、と言えよう。

#### IV

こうして、ツォンカパが論理重視の姿勢を宣言するために『善説心髓』で引用した、件の偈は、タルマリンチェンによって、ダルマキールティ由来の聖典観を用いて、解釈されたことが明確になった<sup>16)</sup>。タルマリンチェンがツォンカパの直弟子であった事実を考えれば、ツォンカパも件の偈を引用する際、ダルマキールティの聖典観を念頭に置いていたと推測することも不可能ではない。しかし、より重要なことは、件の偈がどのように解釈されたのか、あるいは、どのような由来を持つのかといった類のことではなく、その偈に依存して論理重視の姿勢を宣言したその姿勢を、ツォンカパや直弟子達が、はたして、どこまで貫いたのかを具体的に考察することであろう。以上のことを今後の課題として、終始大雑巴であった本稿を終えたいと思う。

#### 注

- 1) テキストは 'gsungs, 「おっしゃた・お説きになった」という尊敬語になっているが、以下の訳文でも、すべて「説く」と訳した。
- 2) サーマン R. A. F. Thurman はこの偈を Pāli Canon 等に在るとするが、具体的な出典個拠を示していない。R. A. F. Thurman *Tsong Khapa's Speech of Gold in the Essence of True Eloquence*, Princeton Univ. Press. 1984. p.190 Notes 12  
 なお、この偈は、以下の本文で紹介する研究書において Skt. 形が紹介されており、本稿の訳は Skt. に従った。Tib. 訳は、'dge slong gam mkhas rnam kyis, 「比丘達あるいは賢者達は……」となっていて、「比丘達よ」という呼格になっていない。
- 3) S. Mookerjee, *The Buddhist Philosophy of Universal Flux*, 1975 (rep.) p. xl
- 4) Masasaki Hattori *Dignāga, On Perception*, Harvard Oriental Ser. 47. 1968.



p. 73 Notes 1

- 5) Th. Stcherbatsky, *Buddhist Logic*, Dover. Pub. Inc. 1962 (Rep.) vol. I. pp. 74-78

なお、シチュエルバックキーは、この偈について、「チベット人によれば、この偈は Ghanasūtra からのものであるが、まだトレースできない」(*Buddhist Logic*. Vol. I, p. 77. Notes 1) と述べている。

- 6) たとえばシチュエルバックキーの次のような発言、「[仏教論理学の] 推進者の意向として、その組織は明らかに宗教としての仏教、すなわち悟りに到る道の教えとしての仏教と何ら特別な関係を持たなかった。」(*Buddhist Logic*. Vol. I. p. 2) は、ツォンカパ等の初期ゲルク派と真向から対立するものであろう。拙稿「チベット仏教における論理学の位置付け」チベットの仏教と社会 山口瑞鳳監修, 春秋社 S. 61. pp. 379-381 参照のこと。

- 7) *Buddhist Logic* Vol. II. p. 325 Notes 1

- 8) ここで訳語の問題に触れておかねばならない。本稿では、(pramāṇa, tshad ma) に対して、〈量〉、〈認識手段〉、〈権威〉という三種類の訳語を与えている。〈量〉は旧来からの訳語ですべてその訳語に統一するべきであったかもしれないが、あまりにも現代的語感にそぐわないと思えたので、書名に出てくる場合のみその訳語を使用した。〈認識手段〉〈権威〉という訳語は文脈上訳し分けたが、必ずしも妥当でないかもしれない。また、pramāṇa 以外にも、(nyāya, rigs pa) は書名において、〈正理〉その他の場合は〈論理〉と訳し、(anumāna, rjes su dpag pa) は書名において比量、その他は推理とした。本稿は、訳語の統一ということからすれば、はなはだ不備なものである。

- 9) 若原雄昭「アーガマの価値と全知者の存在証明」龍谷大学仏教学研究, 第41号。1985 pp. 58-60

- 10) [ ]内は、自注 (p. 108. 1.9) から補った。

- 11) 若原氏は、「この場合考察されるべき聖典は先ず文章が首尾一貫してある一つの意味をなすものでなければならず、第二に人間の目的をその目的を達成する有効な手段と共に明示するものでなければならぬ。」(前掲若原論文, p. 58) と述べ、三条件中の(㊦)を「第二」として、ひとつにまとめている。同氏の説明自体には、筆者は何の異論もないが、ここでは、(㊦)(㊧)の三条件をはっきり区別するべきではないだろうか。なぜならダルマキールティは、自注において、*upasamhāravac chakyopāyaṃ puruṣārt-hābhidhāyi ca śāstram pariṅkṣyeta* (「まとめられた言葉そして、適切な手段、そして人間の目的を述べる論書を考察すべきである。」) (p. 108, 1. 14-15) と聖典の条件を三つとしているからである。さらに、シャーキャブッディ *Sākyabuddhi* (660-720) は、『量評釈注』*Pramāṇavārttikāṭikā* において、k. 214 を注釈して、「三つの功德を具えた (yon tan gsum dang ldan pa) その論書を考察すべきなので」(Je, 243b<sup>6</sup>) と述

べ、条件は三つであることを明らかにしているからである。

- 12) *parokṣa* は他ではすべて知覚外のものと訳しているが、ここではどうしても *atyan-taparokṣa* 永遠に知覚外のものでなければならないので、その意味を持たせるためにあえてこのように訳した。シャーキャーブッディの『量評釈注』には「知覚外のものというのは、永遠に知覚外の対象のことである」(Ja, 245b<sup>1</sup>) とある。
- 13) k.216 中の下線部は、ディグナーガ Dignāga (470-530) の『集量論』 *Pramāṇasa-muccaya* からの引用であることが、指摘されている。前掲若原論文 p.74 注19) および pp.52-53 参照のこと。
- 14) ツォンカパの講義をタルマリンチェンがまとめた備忘録 (brjed byang) 『量の大備忘録』 *Tshad ma'i brjed byang chen mo* では、k.214 に対して次のように言及している。
- 「結合、そして……」と説明されているので取るべきもの (blang bya) と捨てるべきもの (dor bya) と非苦非楽 (gtang syoms) と設定されるべき立場 (phyogs) を首尾一貫して説き、そして人間の望む生天と解脱という目的を述べ、そしてその目的を獲得することに適切な手段を不顛倒に説く聖典は三つの考察によって清浄なるものと確定されるべきなのである。(Pha, 6a<sup>2-4</sup>)
- 15) 用語上の問題は避けて通れないものであるが、この問題に答えるには、筆者は用意不十分である。今後、厳密にその問題を考察するつもりである。若原前掲論文 p.74 注18) および、拙稿『チベットの論理学書における「解脱と一切智者」の証明について』日本西藏学会々報 S.62. pp.10-11, 注8) 参照のこと。
- 16) ダルマキールティとタルマリンチェンとの間にカマラシーラの介在を想定できるかもしれない。なぜなら、『正理一滴論前半要約』におけるカマラシーラの解釈は、タルマリンチェンの解釈の一部〔要約(ii)に相当する部分〕と相似しているからである。以上のことは、全くの予想でしかないが、件の偈に対するカマラシーラの解釈を紹介しておきたい。しかし、すでに、本文で触れたように、カマラシーラの解釈は、シチュエルバックキーにより遂語的に紹介され、また、戸崎宏正氏による和訳もある〔戸崎宏正, kamalaśīla 作 Nyāyabindupūrvapakṣasamkṣipta—現量章のテキストと和訳—, インド古典研究 VI 神秘思想論集, 成田山新勝寺, 1984, pp.484-485〕ので、いまさらそれを紹介する必要はない。ここでは、『撰真實論難語釈』「起感覺的事物を知る人の考察」(atindriyārthadarsīparikṣā) に、やはり、件の偈に対するカマラシーラの解釈が見られ、さらにシャーンタラクシタ Śāntarakṣita (725-788) の『撰真實論』 *Tattvasaṃgraha* でもその偈に触れているので、以下に訳出してみたい。

それ故、「清浄なる黄金 (viśuddhasuvarṇa) のように、これは賢者たちによってよく考察されてから受け入れられるべきである。」と世尊によって言われたこのことを説くために、〔シャーンタラクシタは『撰真實論』 k.3343 において、熱したり、切断

したり、磨いたりした無垢 (amala, dri ma med pa) の金 (kaladhauta) のように〈世尊の言葉は〉考察されても、けして変化 (vikriyā) が起こらないのである。〕と述べたのである。金とは黄金のことであり、無垢とはすべての過失を離れていること (sarvadoṣarahita) であり、[そのような黄金は]、考察されても、熱したりすること等によって、変化が起こらない。それと同様に、世尊の言葉の宝 (bhagavadvacoratna) は、(A) 熱することに似た知覚によって、(B) 磨くことに似た事物の力から生じた推理によって、(C) 切断するという例で示された聖典に依存する推理によっても、変化しないのである。それ故、賢者達は、このような聖典だけに基づいて進むのが合理的であるが、他は然らずと意図したのである。(p.1063. 1.18-23)

以上のカマラシーラの解釈は、『正理一滴論前半要約』と、ほぼ同じ内容であることは、シチェルバッキーの紹介および戸崎氏の和訳と比較して頂ければ明白とならう。ただ、ここで両氏の訳に対して、一つだけ疑義を呈したい。『正理一滴論前半要約』におけるカマラシーラの解釈の最後、〈de ltar yongs su dag pa'i lung la ni yul lkog gyur kyang rtog pa dang ldan pa tshad ma yin par yid ches pa rnam 'jug pa'i phyir〉を、シチェルバッキーは、〈Thus even in those cases when we have a perfectly reliable sacred (Buddhist) text dealing with a transcendental subject of discourse, we will proceed (not by believing in the text), but by believing (in reason as the only) source of theoretical knowledge〉 (*Buddhist Logic*. Vol. I, p.77) と訳し、さらに、〈rtog pa dang ldan pa.....'jug pa'i phyir〉という部分に、〈savikalpaka-pramāṇabhāve, śrad-dadhānāḥ pravartante〉という SKt. を与えている (*Buddhist Logic* Vol. I. p.77 notes 3) また、戸崎氏は、同じ個処を、「なぜならば、清浄なる聖典 (āgama) に (説かれる) 対象が (超) 不可見であっても、信頼されえる人々 (pratyayin) は有分別量を起こすから。」と訳しておられる。両訳とも、筆者には承服できない。rtog pa dang ldan pa (有分別) は rtogs pa dang ldan pa (賢者) の間違いではないだろうか。筆者は、この部分を、「そのように清浄なる聖典において、[永遠に] 知覚外の対象についても、賢者は、[その聖典を] 權威 (tshad ma) であるとし、[その聖典に対する] 信頼が起こるからである。」と訳したい。ただ、北京版 (She 114 b<sup>7</sup>) デルゲ版 (We 93b<sup>1</sup>) は共に rtog pa dang ldan pa であり、他は参照できなかつたことをお断りしておく。

#### 使用テキスト

- ① *The Pramāṇavārttika of Dharmakīrti, Serie Orientale Rome XXII ed. by R. Gnoli*
- ② *Pramāṇvārttikaṭīkā sDe dge ed. No 4220*
- ③ *Nyāyabinduṣūtravākyasamkṣipta Peking ed. No. 5731 sDe dge ed. No. 4232*

- ④ *Tattvasamgraha, Tattvasamgrabapañjikā Bauddha Bharati Series 2*
- ⑤ *Drang ba dang nges pa'idon rnam por phye pa'i bstan bcos legs bshad snying po, The collected works of rJe. Tsong khapa, Bkra-shis-lhun-po ed. vol 21*
- ⑥ *Tshad ma'i brjed byang chen mo, The collected works of rJe Tsong khapa, Bkra-shis-lhum- po ed. vol.22*
- ⑦ *bsTan bcos tshad ma rnam nges kyi tik chen dGongs pa rab gsal, Tohoku No.5453*
- ⑧ *Tshad ma rnam'grel gyi tshig le'ur bya pa'i rnam bshad Thar lam phyin ci ma log par gsal ba, Tohoku No.5450*
- ⑨ *Tshad ma sde bdun gyi rgyan Yid kyi mun sel, Tokoku. 5501*
- ⑩ *Tshad ma'i bstan bcos chen po Rigs pa'i rgyan, The collected works Vol.5, Gangtok*